

第4回 最優秀賞

「森を守る」

福岡県立修猷館高等学校1年

松本 周子さん

幼い頃から母に何度も読んでもらった絵本の中に「木を植えた男」という本がある。荒野と化した土地に、人知れずただ黙々と木を植え続ける一人の男。荒野は何十年もの歳月をかけて豊かな森になり、その周辺には、再びせせらぎと人々の幸せな生活が戻って来た。いつもただ心満たされる結末が嬉しくて聞いていたが、後に自分で読み返したとき、自然の再生力と男の気高い精神に静かで深い感動を覚えた。

中学二年のとき社会科のレポートのテーマに林業を選んだのも、その気持ちで心の隅に抱きつづけていたからだと思う。林業は、木材供給のための人工林を維持・管理するのが仕事だ。一本一本苗木を植え、草を刈り、間伐をし、枝打ちをし、植林から伐採まで三代に亘って手を入れ続ける。今、伐採期を迎えた木々は、伐採者の祖父が植えたものであり、そのあとに植える苗木の伐採はその孫に託されるのである。私は世代を越えてひとつの事業を成し遂げる林業という職業のスケールの大きさに憧れを抱いた。

そして人工林の役目は木材供給だけにとどまらない。人工林は天然林には劣るが、やはり保水機能で土砂崩れや河川の氾濫、水不足を未然に防いでいる。無論、二酸化炭素も吸収する。つまり林業は、国土を守り地球を救う役割を果たしているのである。ただ問題は、人工林は、人が手入れをし続けなければ死んでしまふひ弱な森だということだ。輸入木材に押されて事業の継続が難しくなっている日本の林業の現状と、放置されてま

さに死に瀕している人工林の存在を知って、その時は、林業家になってあの「木を植えた男」のように木を植えようと考えた。

しかし、彼が取り戻したのは単一栽培の人工林ではなく、豊かな自然の森である。そのために彼は、その土地その土地に合った木を探し、選りすぐった種を植え込み、森そのものを育てていったのだ。その森は手入れの必要が少なく、林床に木漏れ日が差し込み、色彩豊かな草花が育ち、多様な生き物が棲める豊かで美しい森だ。保水力も人工林よりはるかに大きい。そのことに気づいたときから私は、林業家として人工林を守るよりも、放置されている人工林を自然の森に戻すための研究に取り組みたいと考えるようになった。そもそも現在の人工林の多くは戦後復興期の一時的な住宅ブームに合わせて天然林を開拓し、木材供給のために植林したものである。今となっては供給過剰である上に、国産材は安くて品質の揃っている平地栽培の輸入材に太刀打ちできないのだ。林業の離職者が後を断たないのも無理はない。

山の斜面に作られた日本の人工林は、放っておいてそのまま天然林に戻ることとはあり得ない。手入れを怠り根の弱った人工林は、大雨による土砂崩れを防げずに、養分を含んだ土壌もろとも流されてしまうからだ。たとえそのあとに種が芽吹いたとしても、しっかりと根が張らないうちに、また大雨に流されることになる。最悪の場合、土砂崩れで岩盤が剥き出しになり、植林ですら永遠に不可能になる。必要なのは、人工林から緩やかに自然の森に移行させる技術だ。

林業の時間的スケールの大きさに惹かれる気持ちと、森を守りたいという気持ちは、今も変わらない。一度手を入れ

たら人間の手から離すことはできないという人工林の常識をいつかこの手で覆し、日本の山々に豊かな自然を甦らせてみたい。

第4回 優秀賞

「高校生になった自分」

島根県立浜田高等学校 定時制2年

森脇 達郎さん

あの時、高校を辞めるその時まで、私は何も考えずに生きてきた。中学校では特に目標もなく、好きでもない勉強をして、親の言ういい高校、いい大学に入り、いい仕事につければ良いことと思っていた。しかし高校に入り、このまま決められたレールの上をただ走っているのもつまらないと思った。

その頃、たまたまインターネットを見ていると、島根県の弥栄村で農業体験を実施していることを知った。調べているうちに、島根県は他の県に比べて農業振興への補助があることが分かった。家に居続ける理由も特になく、また島根県には親戚もいる。そこで私は高校を辞め、遠い埼玉県から島根県に行こうと決意した。弥栄村を訪ねてみると、昔から自然が好きだった私は、すぐにこの地が好きになった。農業体験の作業内容も気に入り、そのまま仕事を始めることになった。好きではない勉強をしなくてよくなる、嬉しく思った。

しかし、農業という仕事をして色々な人達に出会い、色々な事を知っていく中で、初めて周りの人達と比べ、自分に知識が少ないことを感じた。だから私は仕事を続けながら、自分にはない知識を得る為にもう一度高校に行くことを決めたのだ。

初めは周りの人達から二年間仕事と学校を両立できるのか、と言われていた。実際、仕事との両立は大変だった。しかし今は定時制高校に入学して良かったと思っている。全日制の時は勉強が嫌いだったが、今は目標が決まったからか、前より授業が楽しくなってきた。苦手な教科も徐々に努力していこうと心に決めた。新しい仲間もたくさんでき、一味違う学校生活になった。前の高校を辞めたことで、仲間とは学歴や知識など色々な面で差もあり、この高校生活を通してできるだけ、その差を縮めていきたいと考えている。

今、農作業でやっている主な仕事は、干椎茸と味噌作りだ。椎茸はここでの仕事の初期の頃からやっていて、もう三年くらいになる。椎茸の栽培から出荷までを担当している。村内の人から買った仕事場は、夏はとても暑く冬は寒い上に雪も入ってくる隙間だらけの小屋で、ここで作業するのは大変なものだ。でも収穫の時は、椎茸菌を植えた木から椎茸が出てくるという当たり前のことに、毎回自然の力はすばらしいと感動する。味噌も同じだ。蒸した大豆に米麴と塩を加えるだけで発酵して、別の物に生まれ変わるといえるのは、すごいことだと感じている。この仕事をしていると、現代のインスタント食品やレトルト食品のような物にはない昔の懐かしさのようなものを感じる事ができる。私は、この仕事に就くことによって、自然のすばらしさを知ることができた。

もちろん、まだまだ知らないことがたくさんある。学校や仕事を通して、心身ともに成長し、色々な人から刺激を受け、また、自分も他の人に刺激を与えられる人間になりたい。将来も、今のよう自然が豊かな田舎で、農業関係の仕事に就

きたいと思っっている。

最近、日本で認可されていない農薬が中国産野菜で使用されていたことが問題になっているが、都会の人達は中国産の作物が安いためか、買い求める人が多いようだ。だが、農薬を多く使っている中国産野菜は、食べ続けていたら何かしらの異常が体に出る可能性が高く危険だ。しかし自分で作っていたら、安全でなおかつ新鮮な物をおいしく食べ健康でいられる。農村の年配の人達が元気なのはきつとそのおかげにちがいない。高校を辞めて都会から田舎に行くとき、田舎の人達はあまり親切でないとかわれていたが、実際は、とても親切だった。新鮮な野菜を食べ続ければ、この弥栄村の人々のように健康で温かな人間になれるのではないか。私は農業と学校生活を通して、農業の知識や学問を身に付けるだけにとどまらず、人としての「心」というものを養っていきたい。

第4回 優秀賞

「海を越えるメッセージ」

福岡県立三池高等学校3年

川副 真裕美さん

音楽に感動した経験はあるでしょうか。私があります。以前から音楽を聴くのが好きだった私ですが、それでも『音楽を聴いて感動する』という経験は、初めてのことでした。

その日、ラジオから流れた歌が私をそうさせたのです。THE BOOMの「島唄」、その曲でした。沖縄のことを歌ったこの歌は前からよく耳にしていた曲でした。それなのになぜ、今になってと思われるかもしれません。しかしその

時、この歌は日本人ではなく外国人によって歌われていたのです。

この島唄は、今年開催されたFIFAワールドカップで、アルゼンチン代表の応援歌として歌われたのは記憶にも新しいものです。私はその日耳にした曲を作詞作曲したTHE BOOMの宮沢和史さんと、この曲をアルゼンチンで歌い大ヒットさせたアルフレド・カセーロさんのインタビューも放送されました。その中で宮沢さんは語りました。

「僕自身、音楽は国境を越えられないのかと疑っていた。だけど今回のことで確信した。音楽は海を越えられる。」

そして、その後流れた島唄に前までとは違う、新鮮な魅力を感じました。海を越えた音楽。私は今その音楽を聴いているのだ、という感動でした。

日本の歌を日本語のまままで日本語をしゃべれない外国人が歌う。そして同じように日本語がわからない多くの外国人が、それでもその歌に勇気づけられている。考えてみて下さい。これは本当に素晴らしい心の交流に他ならない。この曲がアルゼンチンで大ヒットした理由は私にとってシンプルなものです。深いメッセージがあった、それだけのことです。言葉はわからなくても、心をこめたメッセージは変わらず、失われず伝わるのだと、この出来事で確信しました。

国と国、人と人の争いが絶えず、今なお続いている現代。このように争いが起こるのも言語の違い、宗教や文化の違い、思想の違いによるものだと私たちは学習してきました。しかしそこに伝えたい想いがあれば、たとえ地球の反対側であってもその想いは伝わるのだと思います。相手と向き合うことで自分のメッセージを伝える。たしかに簡単なことなのに私達はそれすらできないままです。

第4回 審査委員特別賞

「生きる」

福岡県立八女高等学校2年

佐々木 あゆみさん

「地球全体が実は大きな島で、そこに住む人々は皆その住民。それなのになぜ、文化や宗教の違いでいがみ合わなければならぬのか。」という宮沢さんの言葉。私たちが社会を背負って立つとき、この言葉を思い出しさえすれば、本当のメッセージを相手に伝えられます。向きあう相手を同じ人間だと思ふこと。国のプライドも、宗教の教えも、全て捨て切ることができればどんなにいいでしょうか。きつとそれはすぐく時間を必要とし、叶うことが難しいことなのかもしれません。

解決策はあります。私たちだけができません。私たちがメッセンジャーになればいいのです。国際化してゆく現代、きつとそれは可能になります。

少なくとも私は将来、海を越えるメッセージを持った人間になりたい。その媒体は音楽だけじゃない。高校に入学したばかりの四月に出会った一編の映画「ニューシネマパラダイス」が私の夢を開花させてくれました。映画の魅力に惹かれた少年トトと老いた映写技師アルフレードとの友情を美しい音楽とともに描く、熱くせつない物語でした。悲しいわけでもないのに自然に流れ出た涙は今も新鮮。こころ洗われるような、身震いするようなものでした。私は幅広い知識を身につけ、このような映像関係の仕事を目指して、島唄が果たしたように世界中の人々に感動とメッセージを伝えたいと思います。次の世代を背負う私たちだけができるチャンスを、この権利を、あなたも精一杯活用しましょう！

この世に生まれてきたことの意味を考えたことがあるだろうか。

私の家は父と母、姉と兄の五人家族である。私には兄と暮らした記憶が全くない。実際は私が生まれて四歳までの四年間は一緒に暮らしたそうだが、当然幼児期の記憶にあるわけもない。兄は十歳の誕生日を迎える前に施設へ入所した。私の兄は細菌性髄膜炎による重度身体及び知的障害者である。兄には言語障害もあり、理解力は二歳程度のものだと言われている。私が物心ついた頃には、兄は正月やお盆や年末などの長期休養中に帰って来るただの「人」でしかなかった。私の中の「家族」に兄の存在はなかったのである。だから私は兄の帰ってくる時期に近づくとも憂鬱な気分になっていた。なぜなら、麻痺のある左半身をひきずり、ヨダレを垂らしながら歩く兄の姿はどこへ行っても好奇の目にさらされるからだだった。私は、両親や姉のように周りの冷たい偏見の視線に耐えることができなかった。特に、同級生に見られることが最大の屈辱であった。何も悪いことはしていないのに、白い目で見られることに耐える強靱さを幼い私が持ち得るわけもなかった。そのせいで私は、一人で歩いていても常に周りの目を意識するようにさえなっていた。

しかし、兄のことを偏見の目で見ていたのは他の誰でもなく、私自身であった。普段は寝る時以外、自分の部屋にはほとんどいない私が、兄が帰省した時だけ部屋に閉じこもることも少なくはなかった。頭では兄に申しわけないと思う反面、心ではハンディーキャップを持つ兄の

存在を素直に受け入れきれない自分が存在したのだ。

そんな私に母は、ある日、障害の子を持つ親の苦しみを話し聞かせてくれた。経済的にも環境的にも家で育てることが困難になったために、大好きな車の絵本に夢中になっている十歳の兄に気づかれないように、こっそり逃げるように施設に預けた時のこと、施設に預けられ太っていた兄が半年で十kgも痩せたこと、兄を連れて死のうと思ったこと。そして何より私が最もショックを受けたことは、「あの子が先に死んでくれたら何の心配も、なか。」という一言であった。「障害の子を残しては死んでも死にきれん。」母の言葉に、私は初めて自分が何をすべきであったのか分かった。同時に何故か涙が溢れた。母の思いが私の何かを変えてくれたのである。それからというもの、私は積極的に兄の側に居るようになった。恵まれた住環境で生活でき、私や姉が十分な教育を受けることができるのも、兄が一人淋しさに耐えて施設に居るからなのだ。それに、何より兄が健常者ならば私は確実に生をうけていない。事実、この世に生を受けたとき、兄は健常者であった。二十二年前の誤診がなければ、私も存在してはいないし、二十三歳となった兄は大好きな車にも乗れ、自分の人生を自由に選ぶこともできたのだ。信じたくないけれど、これが兄の運命であり、私や姉や両親の運命でもあるのだ。

たとえ何をされようとも、人を憎む心も畏れる心も軽蔑する心もない兄は、今の大人たちからも得られないような多くのことを気づかせてくれた。同じ屋根の下で共に暮らす者だけが家族ではない。共に暮らしていなくとも、兄は私の大切な家族の一員であると今さらなが

ら痛感する。そのことを教えてくれたのは他の誰でもなく、兄自身であった。どんなに偉い大人たちよりも、生きるということの意味とその重さを身をもって教え続けてくれる兄は、私の大好きな、かけがえのない兄弟なのである。